

< 目次 >

1. 事務局より
2. 前年度編集責任より
3. 新編集委員より
4. 本年度編集責任より
5. 例会予定
6. 談話会予定
7. 各地の研究会だより
8. 海外情報
9. フレンチリング (frenchling) からのお知らせ
10. 2022 年度収支決算報告
11. 編集後記

1. 事務局より

2022 年度より岸本聖子 (愛知県立大学) と高橋克欣 (大阪大学) が事務局の運営を担当しております。事務局の住所およびメールアドレスについては『フランス語学研究』の奥付、学会ホームページ等でご確認ください。念のため以下にも連絡先とメールアドレスを記します。

〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町 1-8
大阪大学大学院人文学研究科
高橋克欣研究室内
日本フランス語学会事務局
belf-bureau@ml.office.osaka-u.ac.jp

◆会費

会費の徴収は、数年分をまとめてお振込みになるよりも、同封の振り込み用紙を使って期日までに毎年一年度分をお振り込みいただくようお願いいたします。お忙しい時期とは思いますが、学会の円滑な運営のために是非ともご協力をお願いいたします。なお 3 年以上会費の納入が滞っている場合は会員資格が停止され、『フランス語学研究』は送付されなくなりますのでご注意ください。

◆年間テーマ

2023 年度の年間テーマは、昨年度から引き続き「フランス語の語用論」です。

◆投稿規程

第 51 号から投稿方法が変わりました。詳しくは、『フランス語学研究』表紙裏の「投稿規程」及び巻末の「投稿原稿のジャンルについて」をご覧ください。原稿は 11 月末日必着で、事務局宛にメールでご投稿ください。その際「本文原稿ファイル」とは別に「表紙ファイル」を作成してお送りくださるようお願いいたします。フォーマットは学会ホームページにある専用フォーマットをご利用ください。なお郵送や編集委員による持ち込みは受け付けられません。

◆機関誌バックナンバーのアーカイブ化について

2023 年 4 月現在、創刊号から 53 号までが J-Stage で公開されています。

<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/belf-char/ja>

刊行 3 年を経過した号から J-Stage にて順次無料公開しています。会員の皆様におかれましては、バックナンバーとしてご活用いただけましたら幸いです。

(岸本聖子・高橋克欣)

2. 前年度編集責任より

一年前に『フランス語学研究』57 号の編集責任としてご挨拶させていただいてから、瞬く間に一年が経ちました。この原稿を書いている時期はちょうど 57 号の再校の段階で、執筆者の皆さまからお預かりした大切な原稿を冊子の形として仕上げるべく、PDF ファイルと向き合っているところです。このニューズレターを皆さまがお読みになる頃に、本誌が無事お手元に届いていることを願っております。改めまして、57 号に原稿をお寄せくださった皆さま、そしてこの一年間編集委員会で運営に係る審議から編集作業に至るまで、多大なご協力をいただいた編集委員の皆さまに心より御礼申し上げます。特に、56 号編集責任の芦野文武さんには、編集副責任として常に支えていただきました。ここに厚く御礼申し上げます。私自身も、これまで本

学会誌の編集責任をつとめてこられた先生方から引き継いだバトンを次に繋げて参ります。

57号は「論文」、「研究ノート」の他に、「論評」、「紹介」のジャンルでも原稿をお寄せいただき、内容豊かな誌面となりました。また今号では、編集後記でもふれましたが、久しぶりに海外での研究活動報告が寄せられました。これは54号(2020年)以来で、この数年の状況が本学会のように海外の国や地域を研究対象とする分野へ与える影響の大きさを改めて感じました。私も昨年10月に日本で行なわれた国際シンポジウムについて今号で報告しておりますが、昨年のニューズレターのご挨拶の中で記した「« à distance »ではなく、久しぶりに日本とフランスのメンバーが« en présentiel »で集えるよう祈るばかりです。」という願いが叶い、感慨深いです。国内外の往来が概ね以前の状態に戻った今年度は、さらに多くの方が海外での研究活動は然り、海外または日本での国際研究会・学会を開催されることと思います。次号でも多くの方にご報告を寄稿していただければ幸いです。特に、留学中や在外研究中の皆さまにおかれましては、ぜひご自身の研究活動についてご報告ください。

2023年度は58号編集責任の阿部宏先生のもとで、例会、シンポジウム、談話会を中心に学会活動が進められます。さらに、今年度は第3次研究促進プログラム「指標性の言語学」がスタートします。当会の活動がより活発な研究交流の場となるよう、引き続き奮ってご参加ください。また、学会誌『フランス語学研究』については、「投稿規程」「投稿原稿のジャンルについて」を誌面や学会HPでご参照いただき、58号でもさまざまなジャンルにご投稿いただければ幸いです。

(安齋有紀)

3. 新編集委員より

◆栗原唯(大阪大学)

2023年度より編集委員をつとめさせていただくことになりました。私は社会人になって始めたフランス語の発音や文法の面白さに惹かれ、フランス語のことをよりよく知りたいの一心で大学院に進学しました。青山学院大学・パリ第3大学で執筆した博士論文では、フランス語の規範から見れば異色とも言える名詞文を対象に研究を行いました。フランス語の名詞文への単純な疑問から出発した研究でしたが、指導教官である

青山学院大学のフランス・ドルヌ先生から日本語学や発話理論の観点を、パリ第3大学のベルナル・ボスルドン先生から *dénomination* の観点を得て、意味構造や統辞構造のみに捉われない、発話の場に注目した分析を行うことができました。そうした研究を通して、言語に限らない多様な要素から形成される発話の場、そしてそのような場で発話を構築する主体に強く興味を持つようになり、現在ではフランス語名詞文に限らず、日仏の看板・標識やポスター、実況中継などでコミュニケーションがどのように場から作用を受け、また場に作用しているのかを明らかにすべく研究を進めております。

2022年度からは大阪大学外国語学部のフランス語専攻で研究・教育を行う場を持つことができました。これまで(そして今も)多くの先生方、先輩方から教えていただいたフランス語、言語学の面白さを学生たちにも伝えるべく日々精進しております。

在学中から現在に至るまで、自身の研究発表のほか、学会の先生方との交流や様々な研究に触れる貴重な機会を頂き、本学会には大変お世話になってきました。そのような学会の運営に微力ながらも参加させて頂けること大変嬉しく思います。精一杯努めていく所存です。何卒ご指導ご鞭撻のほど、よろしく申し上げます。

◆高垣由美(関西学院大学)

学会という場を私が初めて経験したのは、学部学生の時に拝聴した本学会の例会発表でした。以後例会で多くのことを学ばせていただきました。若手もベテランも対等の立場で討議し、権威主義とは無縁な雰囲気には常に好感を持っていました。また私が海外の研究者を招聘するたびに、学会には快く後援していただきました。

私は山口大学、大阪府立大学、関西学院大学と三大学でフランス語学を教えてきました。専門はテキスト言語学で、規範と言語事実に着目した日仏対照研究から初め、最近ではテキストレベルでの意味的統語的現象の記述を重視して研究しています。

ここ15年ほどは海外でしか発信してこなかった私が編集委員就任を受諾したのは、フランスから Institut de la Langue Française à Orléans (ILFO)と

「日本を代表するフランス語学の学会」との提携仲介を依頼されたからです。ILFO のプロジェクトは、日本の国立国語研究所をモデルとしてフランス語研究の一大拠点設立をめざすもので、世界各国の学会との提携交渉を開始した所でした。私は「日本を代表するフランス語学の学会」はこの SJLF であるべきと考えておりましたし、提携先第一候補として本学会名が挙がりました。ただしその折りに念を押して「SJLF は例会運営や学会誌発行といった学術的活動には熱心だが、会員数や国際的活動実績では勝っている他の関連学会もある。提携相手は本当に SJLF でよいのか。」と問いました。これに対するフランス側の返答は「そういう学会こそがまさに我々の求めているパートナーだ。」というものでした。本学会の編集委員会は、賢明にも直ちに提携に賛成されました。この提携は、SJLF の長年の地道な努力が国際的にも評価された結果でしょう。今後の学会のさらなる発展のために、微力ながらお手伝いさせていただきます。どうかよろしく願います。

4. 本年度編集責任より

会員の皆様こんにちは。不肖ながら、次号(第 58 号)の担当をさせていただくことになりました。

前年度・第 57 号の編集責任を務められた安齋有紀先生におかれましては、中堅教員として本務校でもお忙しい中で、本学会での激務を本当にお疲れさまでした。

実は私は、第 35 号(2001 年 6 月刊)についても編集長を拝命いたしました。その前に運営委員も 4 年ほど担当しており、昔の記憶がさまざま曖昧になっていますが、就任して 1~2 週間でファックス紙 1 ロールがなくなってしまったことだけは強烈な印象として残っています。その後、徐々にメールが一般化してきたので、編集責任になった頃には連絡がかなり楽になっていたように思います。私の前の世代の各委員は、当然ながらファックスもメールもなく、連絡関係はほぼ必ず電話でした。先人の苦勞に思いをはせながら、自分を鼓舞したものです。

ただ、この経験はもう 20 年以上も前のことですので、今ではほとんど何の役に立たないでしょう。PDF ファイルによる投稿や校正、例会や編集委員会の遠隔での開催

など、IT 技術の進歩が学会誌編集や学会運営上のエネルギー節約にも大いに貢献していますが、自分はむしろそれらに落ちこぼれつつあります。これがストレスとなり重要な会議や作業中に突然に倒れて、そのまま寝たきりになってしまう懸念がないこともない。情けないながら、編集委員はじめ会員の皆さんには、厚いサポートをこいねがう次第です。

フランス語学会は小規模である利点を生かして、発足当初より会長や理事等の役職はあえて置かず、編集委員の民主的な合議で全てを進めてきました。何より研究優先というこの柔軟さが、発表や論文等の研究レベルの発展や大学院生等の若手研究者の育成に有効に機能し、かつ学会の維持にも結果的に奏功してきたように思います。自分自身も大学院生時代からこの学会に手厚く守られ、大事に育てていただきました。

最近の若手・中堅会員の皆様は、海外での学会・研究会での発表に積極的で、また国内においてもフランス語学会だけに閉じこもることなく複数の学会・研究会で活躍しており、大変に頼もしく思っています。学会誌次号にもこれらの成果が反映されるべく、微力ながら私も尽力いたすつもりですので、どうかよろしく願います。(阿部宏)

5. 例会予定

2023 年度例会は 4 月、6 月、9 月、12 月の 4 回開催されます。例会案内はホームページによるほか、メーリングリスト frenchling でも配信しています。例会はフランス語学会の会員以外の方でも自由に来聴することができます。入場も無料です。すべてハイフレックス形式またはオンライン形式での開催となりますので、事前に参加申込が必要になることがございます。例会案内をよく御覧ください。みなさまのご参加をお待ちしております。

発表については、フランス語学会の会員の方であれば、どなたでも発表することができます。特に事前審査はなく、申込順に発表が決まります。若手研究者からベテラン研究者までが集まり、研究交流のできるよい機会でもあります。研究成果を業績として公表したい、あるいは学会誌『フランス語学研究』への投稿を検討している方はどうぞ奮ってご参加ください。

発表のご希望やその他例会に関するお問い合わせ：
日本フランス語学会例会運営担当
reikai(a)list.waseda.jp
※ (a)を@に置き換えてください。

以下はニューズレター編集段階の6月10日現在の
予定です。最新の予定は学会ホームページで確認して
ください。

第342回例会 2023年4月15日(土) 15:00-18:00
会場：青山学院大学（青山キャンパス）17号館
17307教室

開催形式：ハイフレックス

(1) 渡邊淳也（東京大学）

「フランス語の条件法とロマンス諸語における
対応形式の対照研究」

司会：近藤野里（青山学院大学）

第343回例会 2023年6月24日(土) 15:00-18:00
会場：東北大学

開催形式：ハイフレックス

(1) 青木三郎（筑波大学）

「フランス語の一般性と文学テキストの特殊性」

(2) 肖宜桐（福岡大学大学院）

「談話標識 tu sais および tu sais quoi」

司会：阿部宏（東北大学）

第344回例会 2023年9月30日(土) 15:00-18:00
開催形式：オンライン

(1) 宮腰駿（筑波大学大学院）・渡邊淳也（東京大学）

「副詞 *franchement* の用法と機能に関する考察」

(2) 発表者：川上夏林（東京外国語大学・大東文化
大学非常勤）

「フランス語心理動詞の認知機能的考察」

司会：古賀健太郎（福岡大学）

第345回例会 2023年12月9日(土) 15:00-18:00
会場：早稲田大学文学学術院（戸山キャンパス）
33号館16階第10会議室

開催形式：ハイフレックス

(1) 井上大輔（上智大学大学院）

「フランス語接続法の意味論的用法と語用論的
用法の関係性について」

(2) 宮脇玲奈（関西学院大学非常勤）

「英語の過去完了形との比較から見るフランス語
の大過去形一語りのテキストの分析を中心に」

司会：芦野文武（慶應義塾大学）

6. 談話会予定

2023年度談話会を以下の要領で開催します。今年度
は「感動詞/間投詞」をテーマに3名のパネリストをお
招きし、仏・西・日それぞれの言語についてのご講演
と討論を企画しています。皆さま奮ってご参加くださ
い。

日時：2023年11月5日（日）14時-17時

形式：オンライン

テーマ：「フランス語・スペイン語・日本語の感動詞/間
投詞をめぐる」(仮)

パネリスト：

山本大地 先生（福岡大学）フランス語学

野村明衣 先生（九州大学）スペイン語学

富樫純一 先生（大東文化大学）日本語学

参加方法、講演タイトルなど詳細が決まりましたら、
学会 HP, frenchling でご案内します。

(世話人：安齋有紀・栗原唯)

7. 各地の研究会だより

◆関西フランス語研究会

関西の大学院生と教員が中心になって研究会を開い
ています。会場は主に関西大学千里山キャンパスです。
ここ数年は、感染症拡大の影響もあり、発表者の希望が
なく、開催されませんでした。今後はオンライン開催
も含めて継続してゆく所存です。

この研究会では、論文や学会発表をひかえる人がそ
の準備のために発表したり、論文を完成したり学会発
表を終えた人がその内容を紹介したりしています。形
式にこだわらず、気軽に意見・情報の交換ができる集
まりです。また、新刊書や論文の紹介、国内外の申し
い研究の動向についての紹介や解説なども歓迎しま
す。発表を希望される方は、以下のアドレスまで気軽
にご連絡ください。

大久保朝憲：tomonori@kansai-u.ac.jp

高橋克欣：k_takahashi@lang.osaka-u.ac.jp

(大久保朝憲)

◆東京フランス語学研究会

東京フランス語学研究会は、大学院生など、若手を中心としたフランス語学研究者の気楽な研究発表、議論、交流の場です。日本フランス語学会と直接の関係はありませんが、多くのかたがたに参会していただきやすいよう、フランス語学会の例会が東京でひらかれる日で、可能な場合は、同じ会場で時間をずらして開催することがあります。

発表資格、会費などの制度は設けませんので、関心のあるかたはどなたでも自由に参会、発表していただけます。発表は、フランス語(学)に関係することであれば、どのようなテーマでもかまいません。また、完成された内容である必要もありません。学会発表の前段階にあたるような習作的な発表や、先行研究にたいする論評といった形の発表も歓迎します。昨年度のニューズレターで既報分以降は、つぎのような発表がありました。

第55回研究会

日時：2022年11月5日(土)14時から17時

実施方法：オンライン

発表者：國松薫(東京外国語大学大学院)

題目：自由会話における *par exemple*

司会：塩田明子(上智大学非常勤)

第56回研究会

日時：2023年4月15日(土)13時から14時30分

会場：青山学院大学(青山キャンパス)17号館

17307教室、およびオンライン

発表者：森一平(東京大学大学院)

題目：「語調緩和」(*atténuation*)という概念について

司会：渡邊淳也(東京大学)

今年度、これ以降の予定は以下のようになっております。

第57回研究会

日時：2023年6月10日(土)14時から18時30分

実施方法：オンライン

(1) 発表者：安藤薫(慶応義塾大学大学院)

題目：言葉遊びの翻訳『アステリックス』をコーパスとして

司会：塩田明子(上智大学非常勤)

(2) 発表者：川瀬瑛美(弘前大学大学院修士課程修了)

題目：フランス語との対照からみたルーマニア語の間接話法における時制の一致

司会：渡邊淳也(東京大学)

(3) 発表者：吉武大輝(東京外国語大学大学院)

題目：現代フランス語の話し言葉における認知動詞 *comprendre* について

一有標識可能と無標識可能の成立条件に関する考察

司会：渡邊淳也(東京大学)

第58回研究会

日時：2023年11月4日(土)14時から17時

会場：千葉工業大学津田沼キャンパス7号館

7410教室

(1) 発表者：Aude Grezka (CNRS/ Université Paris XIII)・木島愛(千葉工業大学)

題目：未定

司会：未定

(2) 発表者：Alexis Ladreyt(北海道大学)

題目：未定

司会：未定

発表を希望なさるかたは、下記ホームページの「お問い合わせ」の項目から世話人あてにご連絡ください。最新の予定については、ホームページの「今年度の研究会」の項目でご確認ください。

東京フランス語学研究会ホームページ：

<http://lftky.jimdo.com/>

(渡邊淳也・塩田明子)

8. 海外情報

コロナ禍の影響で、2020年刊行の第28号以来中断を余儀なくされていたこの「海外情報」欄を、本号から復活させたいと思います。今回は、カナダでの在外研究から帰国されたばかりの杉山香織さんに寄稿をお願いいたしました。

◆OLST (カナダ, モントリオール大学)

私は勤務校の在外研究制度を利用し、2022年4月から2023年の3月まで、モントリオール大学のOLST (Observatoire de linguistique Sens-Texte) で研究を行いました。OLSTは2004年にモントリオール大学に設立され、Théorie Sens-Texteの第一人者として知られるIgor Mel'čuk氏、辞書学や語彙学の専門家であるAlain Polguère氏、ターミノロジーや翻訳学の専門家であるMarie-Claude L'Homme氏、そして自動言語処理やコーパス言語学の専門家であるPatrick Drouin氏が歴代所長を務め、現在はテキストの自動生成や辞書学を専門とするFrançois Lareau氏が所長を務めています。

カナダの6つの大学から30人以上の研究者が集まり、OLSTでは様々なプロジェクトが行われています。研究者の個々の関心は多岐にわたりますが、OLSTで行われる研究の中心は語彙研究です。主に、辞書学、語彙学、ターミノロジー、コーパス言語学、言語教育学、そして自動言語処理に関する研究が行われています。研究分野ごとに独立してプロジェクトが行われているわけではなく、複数の研究分野が融合され遂行されています。これまでにOLSTは研究成果をもとに、用語のデータベース、辞書、ソフトウェアなど数多くの電子リソースを作成し、学術コミュニティに提供してきました。

また、モントリオール大学にあるRALI (Recherche appliquée en linguistique informatique) と共に、ほぼ隔週でセミナーを開催しています。私も11月にAnalyse multidimensionnelle du vocabulaire utilisé chez les apprenants japonais de français dans leur production orale (日本語を母語とするフランス語学習者の口頭産出における使用語彙の多角的分析) というタイトルでセミナーを担当させてもらえる機会を得ました。

OLSTは国際的な共同研究者のネットワークも充実しており、長年にわたって40名ほどの客員教授や多数の海外研修生を受け入れています。OLSTの受け入れ体制が整っているため、渡航前から直接交流をしたことのある先生がいるわけではありませんでしたが、とてもスムーズに客員研究員としてのポストを用意してもらえることになりました。

OLSTは人材育成にもとても積極的です。これまでに約100人の学生がOLSTで研究を行い、修士・博士課程を修了しています。現在は約10名以上の修士・博士の学生がOLSTに所属しており、研究所には個人の研究スペースが与えられています。そのため、研究員だけでなく学生も日々研究所に来てそれぞれの研究を行っており、研究所はとても活気があります。

研究所の雰囲気が常に和やかだということもOLSTの特徴です。OLSTに所属する研究者たちもお昼になると各自の研究室から出てきて、大学院生と共に昼食を取ります。私もこの時間のおかげで、研究所の皆さんとの交流が深まりました。時には皆で学外にご飯を食べに行ったり遠出したりと、楽しい企画もあり、日々の生活にメリハリがつかえました。また、このようなメンバーとの何気ない会話から、研究の着想や、新しい知識を得るということもありました。

私はもともと学習者コーパスに基づく語彙研究を行っていたため、コーパス研究や言語教育研究を行なっているOLSTを在外研究場所として選びました。在外研究期間の前半は、自分の研究プロジェクトを個人で進めていましたが、所属する先生方の授業に出席させてもらったり、日々交流する中で、新しく自動言語処理について学ぶことができました。今話題のChatGPTについても、かなり早い段階からOLSTで話題に上がっていて、先生方や大学院生たちと興味深い議論を行うことができました。これらの経験を経て現在は、日本語を母語とするフランス語学習者がスピーキングで使用する語彙に関して、形態・統語的特徴や依存関係について分析しています。自動言語処理を取り入れることで、手動では限界があった分析が可能となりました。また、受け入れ教授であったPatrick Drouin氏と共に、ケベックの公用語・共通語のフランス語を尊重する法律が制定されるまでの議会答弁を社会言語的に分析するプロジェクトを始めています。これまで行なってきた研究とは少し異なる内容となり、研究の展望が広がりました。

(杉山香織)

9. フレンチリング (frenchling) からのお知らせ

frenchling はフランス語学関係の情報交換を目的とした日本フランス語学会の公式メーリングリストです。当学会の公式行事をご案内するほか、フランス語関係の研究会や講演会などの催事の告知、文献の検索、フランス語についての質問、疑問、議論にご活用いただくことを目的としており、当学会会員でなくても、フランス語に興味がある方なら誰でもご登録いただけます。

フランス語に関する発見や疑問などを共有する場としても、この frenchling をご活用いただければと思います。

加入方法など詳しくは、日本フランス語学会ホームページ内の「フレンチリング」のページをご覧ください。

お手続きや問い合わせは全て frenchling 管理グループアドレス：

g-frenchlingowners@googlegroups.com
までお願いいたします。

また、本年度より frenchling の管理担当者が替わります。1996年の創設時より、2022年度まで管理運営をしていただきました大阪大学人文学研究科言語文化学専攻の有志の先生方に心から感謝いたします。また今後もフランス語学の活発な情報交換の場となるよう、皆様に frenchling をご活用いただけますと幸いです。

(frenchling 担当委員)

10. 2022年度収支決算報告*

収入の部	(単位 円)
会費	658,000
機関誌売上金	91,000
広告収入	60,000
預金利息	18
小計	809,018
前年度繰越金	3,238,692
計	4,047,710

支出の部

BELF56号印刷代金	511,101
BELF57号編集実費	0
ニューズレター印刷代金	29,097
発送費・通信費	80,407
特別発表(講演)謝金・交通費	120,280
事務消耗品費	13,255
振込手数料	27,012
ホームページ管理費	7,731
言語学系学会連合年会費	10,000
事務局移転発送費	13,040
小計	811,923
次年度繰越金	3,235,787
計	4,047,710

次年度繰越金の内訳は以下のとおり

銀行預金 (三井住友銀行普通預金)	47,315
(三井住友銀行定期預金)	2,008,525
郵便貯金 (普通)	38,884
(振替)	1,137,479
現金	3,584
計	3,235,787

* 2023年3月31日現在の収支決算報告。5月28日に開催された編集委員会で会計報告と監査報告がなされ、審議のうえ承認の手続きがとられた。

〒560-0043

大阪府豊中市待兼山町1-8
大阪大学大学院人文学研究科
高橋克欣研究室
日本フランス語学会

11. 編集後記

今年もニューズレターを皆様に無事お届けできる運びとなりました。今回は特に「海外情報」欄を復活させ、コロナ禍を打破する活気ある紙面にできたのではないかと自負しております。筆者も今年の3月に、勤務校の用務でストラスブール大学に出張する機会を得て、現地で同大学のジョルジュ・クライバール先生の研究室にお邪魔して参りました。コロナ禍による自粛期間を経た4年ぶりの渡仏となりました。末筆ながら、原稿をお寄せいただいた皆様ならびに関係者の皆様に、この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

(奥田智樹)